弘前大学教職大学院
News Letter
4つの力
第 29 号 2026.10.16

教職員・教育関係者の「学び」を支援しています！

～ NITS 弘前大学センター主催研修講座紹介 ～

弘前大学教職大学院は、令和６年度より NITS 弘前大学センターを設置しています。東北・北海道で唯一の地域センターとして、NITS（教職員支援機構）が掲げる「変化を前向きに受け止め、探究心をもちつつ自律的に学ぶ教職員の育成」を目指し、受講者が主体的・対話的で深い学びを実現できるよう、様々な研修を展開しています。今号では、当センターの研修講座を２つ紹介します。

教師学び工房：アドバンス講座 2026

～生徒指導・教育相談をともに考える～

８月４日（火）に第１回が行われた当講座には、県内公立小・中・高等学校から１４名と教職大学院のミドルリーダー育成コースの院生８名が参加しました。

今年度から生徒指導をテーマにした当講座の最初のセッションは、当教職大学院の新川広樹による「予防的教育相談に向けたアセスメントと介入技法」と題した講義でした。講義では、生徒指導提要に示された支援構造の段階に応じた教師の働きかけや支援の方法などが具体的に提示されました。さらに、午後の「多層型支援システムに向けた模擬事例検討」では、模擬事例への対応について、グループごとにカードを使いながら検討し、具体的事例への対応方法を学びました。最後の吉田美穂センター長による説明「子どもの世界を読み解くためのヒント」では、問題を抱える子どもの外側にはどんな世界が広がっているかという問いに対して、実際の事例を挙げながら受講者とともに考えました。そして、第２回の講座に向けて、勤務校の事例における子どもの背景について情報を集めるという課題が出されました。

受講者は、講義に対して真剣なまなざしで聞くとともに、演習では、意見を交換しながら、事例への対応方法について協議することで、実践的な学びを展開していました。



インクルーシブな学びの場を考えるセミナー2026

「子どもも大人もゆるくつながる、ほっとできる対話の場づくり」をテーマに、９月１２日（土）に開催された当講座には、教職員や教育行政関係者、一般参加者、大学（院）生、高校生など、オンラインを含めて１０６名が参加しました。



最初のセッションは、弘前市立千年小学校校長の村元　治先生による講義・演習「安心・安全なコミュニティづくりーp4c（子どもの哲学）の視点を踏まえてー」でした。多様性の包摂や発達支持的生徒指導など、次期学習指導要領につながるキーワードと関連付けた講義から、教科・領域の考えを広げ深めたりよりよい集団づくりの手段「p4c〔子どものための哲学（対話）〕」の演習に進みました。参加者は、６名の輪になって、テーマについて対話を進め、会場には笑顔があふれていました。



午後は、杉並区立済美養護学校主任教諭の川上康則先生による講義・演習「安心でき、居心地の良い場所という視点から学校を捉え直す」でした。社会モデル（障害の原因を個人の病気や能力ではなく、社会の体制や環境の障壁にあると捉え、学校側の合理的配慮や環境改善によって障壁を取り除く考え方）で考えることを出発点として、これまでの「当たり前」を見直していくことが「学校や教室を『安心でき、居心地がよい』と感じられるようにする」ために必要であるという川上先生のお話に、参加者たちは大きくうなずいていました。所々で参加者同士が話し合う場面もあり、川上先生のお話から様々な情報共有まで、学びの多い講座になりました。

修了生の活躍～大学院の学びが現場で活きています！～

教職大学院における学びを青森県内へ還元

野辺地町立野辺地小学校　教諭　横濵　和也さん（2025 年度修了）



この度、弘前大学教職大学院の若松大輔先生にお声がけいただき、八戸市教育委員会「経営力・指導力アップ研修講座（校内研究編）」（2026 年 6 月 18 日）で、教員のウェルビーイング向上に向けた「持続可能な校内研究」の在り方について共同で講義・演習を行い、八戸市の先生方と共に考えました。令和７年度に勤務校で実践した研究をもとに、教員の物理的・心理的な負担を減らす「学びやすさ」と、専門性を高める「学びがい」の両立を重視し、従来の「仮説検証型」から「事実解釈型」校内研究への転換を提案しました。具体的アプローチとして、①仮説を捨てキーワードから発想する「仮説生成」、②指導案を「提案シート」へ簡素化する取り組み、③教師の指導法の評価ではなく「子どもの学びの事実」を多角的に解釈する協議会への転換、という３つの実践を紹介させていただきました。

演習では、学びやすさと学びがいについて先生方が思いを語り合う中で、「学校の慣習を見つめ直す」という大切な視点が共有されました。それは、現状のすべてを否定するのでも、ただ現状維持を選ぶのでもなく、「何のために、どのような思いで校内研究（及び教育活動）を行うのか」という本質を問い直す視点です。

これは教職大学院での２年間、私自身が追究し続けてきたテーマでもありました。そのため、大学院での学びが現場の先生方に少しだけですが還元できていることを実感し、大変嬉しく感じた瞬間となりました。今回の研修が、教員一人ひとりが「省察的実践家」として自律的に学び合える組織づくりの一助となれば幸いです。

修了後も続く学びと人とのつながり

青森市立浪館小学校　教諭　浅利　美穂さん（2025 年度修了）



教職大学院を修了し、現場で子どもたちと向き合う毎日を送っています。学級経営や特別支援教育コーディネーターとして悩んだり反省したりすることも少なくありません。それでも以前と違うのは、一人で抱え込むのではなく、「子どもはどう感じていたのだろう」「自分の関わり方はどうだったのだろう」と一度立ち止まって考えられるようになったことです。その土台となっているのが、大学院での学びでした。授業を通して多様な考え方に触れ、授業後も院生室で、自然と対話が始まり、「そうそう、それが言いたかった」と、自分の中の思いが少しずつ言葉になっていく瞬間を何度も経験しました。一人では気付けなかった考えに出会い、対話を通して学びが深まっていく。その過程そのものが、私にとって「学ぶことって楽しい」と感じられる時間でした。

修了後も、仲間や先生方とのつながりは今も私の大きな支えです。先生方が折に触れて気に掛けてくださることや、仲間がそれぞれの現場で頑張る姿に励まされ、「自分も頑張ろう」と前を向く力をもらっています。また、大学院でいただいたご縁から研究会で実践を発表する機会をいただき、その準備や発表を通して多くの先生方と対話する中で新しい視点にも出会いました。大学院での出会いと学びは、修了した今も私の教師としての核となり、日々の実践を支え続けています。大学院で始まった学びは修了とともに終わるのではなく、人とのつながりの中で今も広がり続けています。これからも、人とのつながりや対話を大切にしながら、子どもたちと共に学び、私自身も学び続け、一人でも多くの子どもたちが安心して過ごせる学校づくりに取り組んでいきたいと思います。

院生が語る～教職大学院の授業と実習～

《授業編》

「教育課程編成をめぐる動向と課題」「教育課程の開発と実践」

「教育課程編成をめぐる動向と課題」では、教育課程編成の基礎となる思想やその歴史的変遷について学びました。「真正の学力」や「履修主義と修得主義」といったテーマについて、院生同士で議論をすることで、その概念の捉え方や学校現場における実際について考察し、理解を深めます。続く「教育課程の開発と実践」では、理論的な学びを基盤として、カリキュラム・マネジメントについて検討しました。パフォーマンス課題や単元配列表の作成などの演習を通し、教育課程を具体化する手法について理解を深めるとともに、理論と実践を結び付けながら教育活動を構想する視点を養うことができました。実践研究をする上で、土台となる知識を学ぶことができる授業でした。

（ミドルリーダー養成コース１年　加賀　千裕）

「学校安全と危機管理」



実際に教育現場起きた事故や事件、震災時の対応、熱中症、体罰などの事例を取り上げ、教訓を踏まえて学校安全の確保と危機管理体制の構築について検討する授業です。事例を確認した後、グループワークやパネルディスカッション、ブレインライティング、フィジカルアクティビティなど多様な活動で学びました。時には映画を視聴して議論する授業もありました。院生同士で協働しながら発表資料を作成し、意見交換を行うことで考察を深めました。学びを通して、学校安全と危機管理は継続的に更新する必要があり、リスクとベネフィットの検討に加え、教職員・生徒・保護者・地域住民が協働し、熟議を通して改善を続けることが重要だと実感しました。

（教科領域実践コース１年　栗橋　礼昂）

《実習編》

「教育関連施設観察実習（青森県総合社会教育センター）」



ご講義の中で、生活行動の行動者率において、青森県は学習や自己啓発、スポーツや文化活動に時間を使わずに家でテレビを見て過ごす人が多いと聞き、様々な社会教育の研修の中心である総合社会教育センターの役割の重要性に気付くことができました。また、様々な事業について共通の課題となるのが、広報活動であることがわかりました。チラシでもSNSでも学びたい人、必要な人に効率が良く届けられるかは非常に難しいので、学校からも「生涯にわたって学び続けることの楽しさ」と同時に「感度高く情報を得ること」を伝えていきたいと思います。

（ミドルリーダー養成コース１年　能澤　大輔）

「学校フィールド実習（弘前市立第一中学校）」



学校現場に継続して入り、授業観察と授業実践の両方を経験しています。授業観察を重ねる中で身についたのは、生徒の姿から授業を見る視点です。先生が何を教えているかだけでなく、「どんな生徒が活動に参加できているか」「どこで集中が途切れてしまうのか」など、生徒の反応にも目を向けるようになりました。そして実際に自分で授業をしてみると、観察だけでは分からなかった難しさにも気づきます。同じ活動でもクラスによって反応が異なり、その場で授業を調整することの難しさと大切さを実感しました。

「見る」ことで得た気づきを「やってみる」ことで確かめ、また振り返る。この繰り返しが、フィールド実習での大きな学びになっています。（学校教育実践コース１年　石澤　晴太郎）

私の研究―中間報告会に向けて―

※中間報告会では、2 年次院生が現在進めている研究について発表を行います。
※ミドルリーダー養成コースの院生については所属校を記載しています。

教育内容・教材のレリバンスがある授業づくりに関する考察～中学校英語の授業に着目して～

葛西　健介（深浦町立深浦中学校）



授業後の生徒の振り返りを分析すると、「予定を共有するのに便利」「将来外国人の同僚と話すのに使えそう」など、生徒が学習内容に対して多様な意義（レリバンス）を見出していることが窺えます。こうした実感は教員の指導意図に基づくものなのか、あるいは生徒が自身の文脈の中で独自に見出したものなのかを分析・整理し、授業改善に繋げていきます。生徒が「英語を学ぶ意義」を実感できる、魅力のある単元を構想していきます。

教師の「学び合い」コミュニティの構築に関する実践研究

～子どもを「見取る力」の向上を通して～

工藤　愛美（弘前大学教育学部附属小学校）



勤務校の先生方や子どもたちに支えられ、あっという間に半年が過ぎました。実践研究では、教員同士が安心して学び合う場「結テラス」を立ち上げました。子どもの学習の様子について対話を重ねながら、教師の見取る力や互いに支え合う関係性(同僚性)がどのように育まれるのかを探り、よりよい教育実践につなげることを目指しています。中間報告会では、これまでの成果や課題を整理しお伝えできればと思います。

対話を取り入れたキャリア・パスポート実践と教員省察に関する研究

櫻庭　レミ（弘前市立東目屋中学校）



勤務校の生徒の実態に即して再構成したキャリア・パスポートを活用し、学年団による複数教員体制での授業実践と、継続的な教員省察に取り組んでいます。生徒同士の相互承認を促す対話的な活動をとおして、単なる個人記録の枠を越えた生徒のキャリア発達の姿が見られ、それを支える伴走的な関わりへの気づきが教員間でも深まりつつあります。中間報告会では、授業や省察で見出された具体的な事実をもとに、これまでの成果と課題を報告します。

感情に寄り添う安心な学級づくり～SEL と授業改善の一体化を通して～

佐々木　洋子（南部町立名川小学校）



SEL（社会性と情動の学習）を通して、児童の感情に寄り添う学級づくりに取り組んでいます。私は、学校生活の中で生まれる様々な感情に目を向け、子どもたちの感情そのものを大切にしたいと考えています。子どもが自分の感情に気付いて適切に表現したり、相手の感情を理解したりする力を育むことで、安心して学び合える学級づくりを目指しています。中間報告会ではこれまでの実践を整理し、進捗を報告させていただきたいと考えています。

自己受容を高める学級づくり～ショートクラス会議と肯定的なアプローチ（勇気付け）を中心として～

篠原　英樹（青森市立佃中学校）



生徒が夢や目標に向かって前向きに生活するには、ありのままの自分を受け入れる「自己受容」が大切です。

本研究では、多様な考えを共有する「ショートクラス会議」と教員からの「勇気付け」を通し、学級への貢献感と自己受容を高める実践を行っています。

佃中学校の先生方の支えのもと、４月から対話の土壌を整え、クラスメイト同士のつながりを育んできました。中間発表では、生徒の貢献感を高め、自己受容を育む手立てを報告します。

垂直的ロールモデルによる「自己決定」の創出と「教師の見取り」の変容について～異学年・異学部交流を通じた共同エージェンシーの実践～

福田　正道（青森県立八戸第二養護学校）



特別支援学校における子どもたちの「自己決定」の力を育むため、試行錯誤しながら研究を進め、早くも一年半が過ぎました。現在は小・中・高等部の縦の繋がりを活かした異学年・異学部交流を実践し、子どもたちの自発的な自己決定を促すとともに、教員の見取りの変容について追究しています。周囲の先生方の

ご協力に心から感謝しております。中間報告会ではこれまでの歩みを整理し、今後の実践研究の充実に繋げたいと考えています。

特別支援学校における教育的鑑識眼の言語化と共有
～ルーブリックの協働作成と活用を通して～
松浦　里美（青森県立青森第一養護学校）



勤務校に戻り、多くの先生方のご理解とご協力を得ながら、試行錯誤する日々を送っています。子どもの「どんなところを見ているか」、それを「どのように評価しているか」について対話し、子どもを見る視点を増やしたり、深めたり、目線をそろえたりすることを目指して実践を行っています。中間報告会では、これまでの成果と課題を整理し、肢体不自由支援学校における子どもたちの学びの様子についても報告させていただきたいと考えています。

定時制高校生の社会的自立を支える地域協働の実践～コミュニティ・スクールを起点として～
三國　里美（青森県立北斗高等学校）



私は、定時制高校生の円滑な社会移行に向け、社会性の向上を目指した研究と実践に取り組んでいます。コミュニティ・スクールと連携し、生徒が地域と関わりながら学ぶ多様な社会参画の機会を創出するとともに、総合的な探究の時間を活用したフィールドワークを実施してきました。また、生徒一人一人の課題や強みに応じた支援を行うため、校内支援体制の整備にも努めています。本研究を進めるに当たり、多くの先生方や地域の皆様からご協力をいただきましたことに深く感謝申し上げます。中間報告会では、これまでの成果と課題について報告いたします。

主体性を育む保健教育の在り方の検討
～「地域活性化プロジェクト」の実践を通して～
横濵　知愛（東北町立東北中学校）



勤務校では３年前より「地域活性化プロジェクト」に取り組み、地域の方々と健康・体力作りに励んできました。１年目は教師主導、２年目は教師の助言のもと生徒へ役割を委ねてきました。３年目となる今年度はこれまでの経験を生かし、生徒主体の計画・運営に挑戦します。本研究では、プロジェクトにおける生徒の参画過程を分析し、生徒の主体性がどのような場面で発揮・形成されるのか、また主体性を育むために教師にはどのような支援が求められるのかを検討していきます。

自律的健康観の育成のための視覚化・言語化に着目した保健室来室記録のあり方
遠藤　佳子（学校教育実践コース）



保健室における実践として、生徒の自律的健康観の育成に向けた保健室来室記録のあり方と生徒の変容について研究しています。

生徒の持つ多様な背景を踏まえながら、生徒自身が自分の不調がわかり、健康行動に繋げられるような支援を行うために、物体として来室記録が持つ役割と養護教諭の専門性を照らし合わせながら、生徒の実態に寄り添っていきます。

生徒の学習意欲を高める導入のあり方に関する一考察～英語コミュニケーションⅡでの実践を通して～
斎藤　広和（学校教育実践コース）



私にとって英語は比較的大事な存在ですが、多種多様な楽しい時間、趣味、夢、あるいは時に悩みや葛藤を抱える高校生にとっては、必ずしも英語学習の優先度が高いとは限らないと思います。従って「英語は将来、必要になる」と言葉で訴え続けても、彼らに英語の魅力を伝えきれないと考えます。そこで、まずは少しでも授業が楽しいと感じてもらえるよう、またゆくゆくは学習に集中して取り組んでもらえるような実践を目指し、「英語の魅力」に引き込めるよう努めてまいります。

「交流及び共同学習」の充実に向けた一考察
～図画工作科における対話から見通しをたてる場面の創出～
松田　怜紗（学校教育実践コース）



本研究では、単元に応じた条件の設定やきっかけづくりを通じ、児童同士の自然な交流と対話を生み出すことを目的としています。図画工作科はそれぞれの表現に価値がある教科だからこそ、

誰もがのびのびと表現できるような環境づくりが欠かせません。一人でじっくり取り組みたい児童、友達と一緒にイメージを広げたい児童、アイデアを広げることが少し苦手な児童など、多様な学びのスタイルを尊重し合える授業の実現を目指して研究に取り組んでいます。

自己効力感を高める教師の効果的な働きかけ

村山　梨玖（学校教育実践コース）



私は、児童が自分の能力を信じて未来を切り開けるようになるための研究を行っています。

教師の発話を、自己効力感を高める４つの情報源を基にカテゴリー化を行い、それを児童の言動、表情と結びつけての分析や、エピソード記述によって明らかにします。一斉指導の中でも個に伝わる発話や児童を見取る力を高め、一人ひとりが安心して自分の力を発揮できるように意識しています。中間発表会に向けて、理論との結びつきをより深めながら分析を進めていきます。

当事者意識を持たせられるような外傷予防教育について～頭部外傷の罹患性と重大性に着目して～

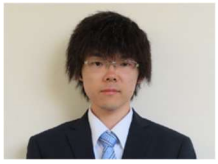
渡辺　結衣（学校教育実践コース）



子どもは頭部外傷を負うことが多いため、保健指導を通してその発生件数を減らせるのではないかと考え、研究に取り組んでいます。そこで、学校現場で起こり得る頭部外傷の罹患性と重大性の認知に着目し、検討しています。中間報告会に向けて、子どもが頭部外傷を自分自身にも起こり得ることとして捉え、当事者意識を持って外傷予防について考えられるような、養護教諭による保健指導の在り方を整理しています。

高等学校数学科におけるユニバーサルデザインに基づく授業づくり～全ての生徒が「参加・理解」できる授業を目指して～

有働　将之（教科領域実践コース）



ある本に、「そもそもなぜ授業に〈参加〉しないのか。という問いに対し、授業が〈理解〉できないからである。」と記載されていました。私は、このように密接に関わる「参加」と「理解」に関心をもち、高等学校数学科において全ての生徒が「参加・理解」できる授業づくりに関する研究を行っています。参加が理解のきっかけとなり、理解が次の参加を生み出す。そんな学びの循環を実現できる授業を目指しています。

高等学校国語科における文学の解釈を深めるための授業づくり

小山内　緋流（教科領域実践コース）



私は高等学校国語科を対象とし、文学作品を通じて、生徒たちが解釈を深めるためにはどのような授業づくりが求められるのか、を日々探究しています。文学作品を読む上では、読解（内容や形式の把握）は大切な要素となります。そして読解を経て、読み手は登場人物の心情や行動に対し、解釈（作品に対する意味付け）を広げていくことになります。今後も生徒たちが解釈を深め、文学を読む意義が実感できる授業を実践していきたいです。

高等学校公民科における思考力・判断力・表現力を養う授業実践

相馬　龍乃介（教科領域実践コース）



「きわめてゆっくりと歩む人でも、つねにまっすぐな道をたどるなら、走りながらも道をそれてしまう人よりも、はるかに前進することができる」（デカルト『方法序説』）私は高等学校公民科において、秀でた知能を有するだけではなく、その使い方をどのようにするべきか、対話を中心とした実践を通して模索しています。快く協力してくれる学校関係者の皆様や生徒に感謝し、公民科の興味深さを伝えることができる授業を目指します。

生徒が歴史を現在と関連させて捉えることができる歴史授業実践とはどのようなものか

武田　　遼（教科領域実践コース）



私は現在「生徒が歴史を現在と関連させて捉えることができる歴史授業実践とはどのようなものか」というテーマを掲げ、授業実践に取り組んでいます。そこでは、生徒たちがどのような文脈をもってここまで育ってきて、教材に触れた時どのように感じるのかということを踏まえての授業実践が

大切なのではないかと考え、試行錯誤しながら授業づくり及び研究に励んでいます。

中学校数学科における生徒の苦手意識の克服のための「学び合い活動」を重視した授業実践
～相互評価を取り入れて～

羽場　匠洋（教科領域実践コース）



私は、中学校数学科における生徒の苦手意識を克服するため、「学び合い活動」と「相互評価」を取り入れた研究に取り組んでいます。特に、「答えを教えずヒントを出す」というルールの下、学び合い活動が生徒にどう影響するかを分析しています。ヒントを介して見通しを持ち、自力で解決して自信を深める生徒の姿にやりがいを感じています。中間報告会では、これまでの成果を整理し、２月の最終報告に繋がる場にしたいと思います。

中学校理科授業における学習行動への影響について～授業 UD と興味に注目して～

福岡　寛丈（教科領域実践コース）



生徒の理科に対する興味を高めるために日常生活と関連させた話題提供や、生徒が自主的に学習に向き合えるように疑問を大事にした授業を実践しています。多様な生徒が在籍するので子どもたちが楽しく学び合い、わかる・できる・探究することができるようにユニバーサルデザインの視点も取り入れるようにしています。実践研究は再現性がないことが多くありますが、結果に真摯に向き合い考察をしていくことを意識しています

２年次院生の研究中間報告会を開催します

２年次院生が自身の実践研究について報告します。ミドルリーダー養成コースの院生は、組織を活かして学校課題解決に取り組める教師を目指して、また、ストレートマスター院生は、教科・領域の指導を通して子どもたちの資質・能力を高める教師を目指して、研究に励んでいます。皆様のご参加を心よりお待ちしています。

【日　時】　令和８年 11 月１４日（土）8：40～15:30　〔受付〕8：20～8：35

【会　場】　弘前大学教育学部＆Zoom によるオンライン会場
〔第１会場〕１階大教室（主会場）　〔第２会場〕２階大教室

【次　第】
（１）開会行事　　8：40～ 8：50　〔第１会場〕
（２）２年次学校教育実践・教科領域実践実践コース研究報告
9：00～11：50　〔第１会場〕及び〔第２会場〕
（３）２年次ミドルリーダー養成コース研究報告
12：40～15：11　〔第１会場〕及び〔第２会場〕
（４）閉会行事　15：20～15：30　〔第１会場〕

【申込期間】　10 月 12 日（月）～11 月９日（月）
下記ＵＲＬまたは右のＱＲコードからお申し込みください。
https://forms.cloud.microsoft/r/XmVzT9k5mk

＊中間報告会で報告される研究の内容を、本誌５～８ページで紹介しています。

■報告会終了後には、現役院生と修了生との交流会（ホームカミングデー）を開催します。



JICA 研修生と教職大学院生が交流しました！





９月７日（月）、本学で研修中の東南アジアやアフリカなどから来日した JICA 研修生たちと、当教職大学院生が交流しました。院生たちが企画・運営を担い、丁寧に事前準備を行ってきました。当日は、受付や会場内で、研修生と院生たちが笑顔で “Good morning.” とあいさつを交わし、プログラムがスタートしました。最初のアイスブレイクでは、サイレントラインナップ（言葉を使わずに、誕生日順などの条件に従って並ぶゲーム）で緊張を解きました。最初は緊張気味の両者でしたが、次第に打ち解け、会場には笑顔と笑い声があふれていました。続いて、院生が大学院の学びや生活、日本の学校についてプレゼンテーションしました。最後は、研修生と院生を児童に見立て、算数の授業体験を行いました。余りが生じる割り算について、みんなで考え、最後は研修生と院生が混じって問題を解決した時の笑顔は、言葉の垣根を越えて協働したという達成感の表れのようでした。異なる文化を持つ方たちとの交流の企画・運営は、院生たちにとっては一種のチャレンジでしたが、そこから得た学びも大きな経験になったようです。

「学び」と「笑顔」あふれる大学院生活

令和８年度も中間地点を過ぎ、１年生は大学院生活にもすっかり慣れ、毎日の授業や実習に励んでいます。２年生は、中間発表会に向けて各自のテーマに基づいた研究を進めています。ここでは、令和８年度前半を振り返って、スナップで大学院生活の様子をご覧いただきます。









Campus Life 2026









〈編集・発行〉弘前大学大学院教育学研究科教職実践専攻（教職大学院）
〒036-8560　青森県弘前市文京町１番地
TEL　：0172-36-2111（代表）
Email：k-daigaku01@hirosaki-u.ac.jp